

第2回

2025年 7月 27日(日)
13:30~15:30

令和7年度 特別企画
事前勉強会

西の湖すてーしょん

〒521-1311 近江八幡市安土町下豊浦4187-3

参加者46名

講演会

「発掘調査から見る安土城」

～ 主郭部とはどのようなところか ～



いわし たかひろ
講師：岩橋 隆浩 氏

滋賀県文化スポーツ部文化財保護課
主幹兼安土城・城郭調査係長

今回の講演会も市内外から多くの方にお越しいただきました。

今回は黒金門より内側、信長のプライベートなエリアといえる「主郭部」についての解説と、昭和～平成の「主郭部」の発掘調査の結果を振り返りつつ、現在進行中の令和の大調査で分かってきたことを比較しながら、丁寧に分かりやすくお話しさせていただきました。

講演の中の一例ですが、天守跡について、昭和15年の調査当時は土を入れたりして保護されたようですが、長い年月を経て土も徐々に減り、以前の写真と見比べると礎石の露出が大きくなっていることを教えてくださいました。

観光客の来訪や、年月の経過とともに地形が変化してしまうことによる調査の難しさも感じた一方で、発掘調査を重ねることで、仮説が事実となり、小さな歴史が解明されていく面白さを感じました。

詳しくは当日の資料をご覧ください。



質問タイム

講演会後の質疑応答では、参加者からの質問に丁寧に答えていただきました。
以下に紹介いたします。

質問 1 **天主は南向き、本丸、三の丸は南西向きとなっているが、理由はあるか。**

岩橋／ 山城では、どのようにして平坦な地形を作り出すかが重要である。高低差、尾根の向きなどで規制がある中で、その地形を生かしてつくった結果と言える。

質問 2 **赤色立体地図は実際との整合性はあるか。**

岩橋／ ある。

※赤色立体地図とは？

航空測量によって得た 3 次元データをもとに、地形を赤色の濃淡で表現した地図です。等高線によって表現していたこれまでの地図に比べて、地形の凹凸が明瞭に表現でき、また細かな地形の変化を表現できる地図として遺跡の測量に導入されている最新の地図です。(滋賀県の HP より抜粋)

質問 3 **主郭部は 5 段階の標高差で構成されているが、その意図は何かあるか。**

岩橋／ 縄張りについては専門でないので、明確にお答えできないが、攻められにくいようになど、何か意図はあるのだろうと思う。

質問 4 **安土城の「破城」について。本来なら石垣の隅角を重点的に壊し、V 字型になると思うが、安土城はなぜ水平に崩されているのか。これは「破城」と言えるのか。**

岩橋／ 指摘の通り、通常は修復しにくいように隅角を崩し、V 字型に崩れるもの。(名古屋城ははっきりと V 字型に崩されている。) 一方、安土城の場合は水平に崩れているのだが、この水平というのが、自然に崩れてなるものでなく不自然すぎるがゆえに「破城」であると言うしかない。

質問 5 **「大手門」「大手道」と言われるところは確定か？ 城下町につながる「百々橋口道」の方が大手道ではないかという中井均先生の話聞いたのだが…。**

岩橋／ 指摘の通り、本来の役割としての「大手道」は「百々橋口道」だと言える。ただ、昭和のある時から現在の場所を「大手道」と言い始めてそのままになっている感じ…。

質問 6 **天主は北東に崩れたと思うが、金箔鯨瓦が出たのはどこか。**

岩橋／ 金箔鯨瓦は米蔵から出土している。

金箔鯨瓦は天主にのっていたものではなく、三の丸または門にあったのでは、と考えられる。理由は、鯨瓦の大きさがあまり大きくないから。天主の屋根にのっていたならもっと大きいはず。また、天主は北東に崩れたことが分かっており、そちら側から良い出土品が出ている。

質問 7 **本丸取付台付近の建物同士のつながりについて推察されていたが、これは県の公式見解となるか。**

岩橋／ 公式としては発表していないし、報告書でもそこまで踏み込んではいない。自分が現役のうちに解明したい。